今後につなげていくために

2007 年 7 月 28 日
東部海浜開発事業検討会議
市民委員　岩田　健吉

１．はじめに

おそらくは多くのナイチャーがそうであるように、海に憧れ・魚に憧れ・亜熱帯に憧れて、私が沖縄市の泡瀬に移住して丸一年が経ちました。

その間に、東部海浜開発事業検討会議を通し・干潟での魚とりや遊びを通し・子育てを通して、沖縄市のこと・泡瀬干潟のことを少しずつ知ることができました。

東部海浜開発事業検討会議は本事業内容の精査と情報公開の任を負ってスタートしました。国・沖縄県・沖縄市・地元住民が関与してきた経緯や歴史を紐解くだけでも膨大な資料数にのぼり、半年余りの任期ではとても細部までは精査しきれず、また一市民レベルの情報公開まではほぼ手が付けられなかったなというのが私の実感です。

また、それほどに本事業が巨額の税金が投入される、大規模な、沖縄市の将来に大きくかかわる一大事業であるということも、強く実感させられました。

以上のことから、行政や関係者だけが事業にかかわって進めていくのではなく、市民一人一人が事業や泡瀬干潟に関心を持ち、理解し、各々の意見を持つことが大切であり、またそうなるために、いかに市民に情報を発信して市民を巻き込んでいくのかが、今求められていることではないかとの思いを強くしました。

そのための第一弾が本検討会議であり、本検討会議だけで精査と情報公開が終了するのではなく、これから市民が埋立・泡瀬干潟・東部海浜開発事業について考えを持つための出発点となって今後に繋がっていけば、本検討会議の意義があったといえるのではないかと思います。

２．会議を通して得た私の考え・感想

2-1.円卓会議の実現

本検討会議自体も円卓会議の範疇であるが、さらに進めて事業への推進・反対を唱える団体や埋立の事業主体である国・沖縄県までも含めて一堂に会する場が必要であると思う。

本検討会議は賛否によらない第三者的立場であったことから、聞き取り調査において推進・反対団体から、賛否が割れて平行線をたどるままの現状ではデメリットがあること・同じテーブル上で話をする用意があるとの回答を得ることができた。

このことから円卓会議には、両者が妥協点・共通点を見出して歩み寄るための橋渡しの役割も果たし得ることが実感できた。

困難が予想されるが、まずは互いに面と向かって話しをする場を作ることが、市民合意に向けた第一歩になるのではないかと思う。

2-2.地元の声

私はわずか30軒程度ではあるが、泡瀬地区で居酒屋・美容室等を営む方々に、検討会議で作製したポスターの貼り出しを依頼して回った。驚いたことに門前払いは一軒もなく、進んでポスターを貼って頂いたり、事業への考えを語ってくださる方が意外と多かった。

おそらく泡瀬地区の方々は事業への意識が高く、また意見を出す場を求めている方が多いのではないかと感じた。例えば泡瀬地区での定期的な事業説明会やアンケート調査など、地元住民の隠れた声を表に出す場・行政に伝えて事業に反映させる場が必要なのではないかと思う。

2-3.市民の関心

一方で泡瀬を離れてみると、丘の上に住む多くの市民にとって事業や泡瀬干潟への関心はまだまだ低く、事業についてほとんど知らない人も意外と多いのではないだろうか。

本事業は沖縄市の将来におおいにかかわることであるので、他人事ではなく自分達一人一人がかかわっていこうという意識を全市民が持てるように、まず事業について知らせていくことが今後求められるのではないかと思う。

市民への広報活動が、よりいっそうの重点課題として挙げられると考える。

2-4.今できること

私は泡瀬に住んでいて、よく子どもと散歩をしている。ひとたび干潟周辺に目を向ければ、海・海岸・道路・公園のあちこちにゴミが散乱し、絶えず生活排水が流れ込んでいるのが現状である。

ゴミのあふれる現状を憂い地元を中心としたたくさんの方々が清掃活動を行なっておられ、その尽力には頭が下がる思いである。私も何度か参加したが、「2・3日もすれば元通りにゴミが散らかっている」と嘆かれる声をよく耳にした。また参加者は大人ばかりで、子どもや若者の参加が見られないことがとても気になった。「子や孫を誘っても来ないんだよ」とも言っておられた。

地元の方々が受け継いできたはずの「海を愛する心」が、次の世代へ受け継がれず、消えて無くなってしまうのではないかと不安に思ってしまう。

仮にマリンシティ泡瀬が建設され立派な建物ができたとしても、海に下水が流されまち並みや沖縄市にゴミがあふれたままでは、果たして観光客はどう思うであろうか。いいまちだと思うだろうか。また来ようと思うだろうか。

各団体や事業者への聞き取り調査でも、生活排水・ゴミについては解決すべき問題との共通認識があり、市民の「モラル」に帰結するとの声が多かった。

しかし各個人の「モラル」に期待しているだけでは、現状は変わらないと私は思う。市としても取組みを進めていると聞いたが、より強い意思を伴った生活排水・ゴミに関するルール作り・積極的な啓蒙活動の実践・将来を担う子ども達へ海やまちを愛する心を伝えて育てることが必要だと思う。これらの市民一人一人に対する地道な活動へ力をかけていくべきではないかと考える。

例えば、泡瀬小学校近くの黒潮公園ではシルバーの方が沖縄市から委託を受けて公園の清掃・芝生の刈り取りなどをとても丁寧にやっておられる。しかしその側で子どもがお菓

子の袋を捨てたり・散歩している犬の糞を放置して帰る大人の姿を目にすることがある。自分の捨てたゴミを誰かが掃除してくれているという当たり前の意識を市民が持つために、掃除をするだけでなく市民へ注意・指導もあわせて行なう指導員・監視員という方向に持っていけないだろうか。

また、泡瀬のクシの浜（サムズバイザシー近辺）では新垣さんが長年にわたって「子ども達が裸足で歩ける砂浜を取り戻したい」との強い熱意で浜の清掃・管理をボランティアで継続されている。このような方を市が雇用して浜の管理・清掃・監視を委託すれば、新垣さん自身も活動がよりスムーズに行なえるだろうし、手入れの行き届いた海浜が将来に残されていくこと・浜を大切にする心を育てることへ繋がっていくと考える。

そして泡瀬のメーヌ浜でも同じような活動をできればと思う。

一部の人だけが活動を行なうのではなく、泡瀬の子ども達や親を巻き込めるようなボランティア活動を継続して行なっていくために、沖縄市が自治会・小中学校等と連携してゴミ・生活排水に対する啓蒙活動を盛り上げて・牽引していくことが必要ではないかと思う。それだけの予算やマンパワーをかけるべき価値のあることで、地道な地元の活動こそが沖縄市の将来に必ず繋がっていくと思うのである。

2-5.東部海浜開発事業の名称

私は「東部海浜開発事業」とは何を指すのか、市民委員応募の時はおろか、恥ずかしながら本検討会議中盤頃まで知らずにいた。また、知人に知らせる時やポスター配布時にもこの名称を出して一回で理解できた人はほとんどおらず、「泡瀬干潟の埋立」「埋立地の利用計画」のキーワードを用いて説明して、やっとピンとくる人が多かった

そこで本事業が市民に理解されるための第一歩として、名称変更を提案したい。私が思いつくのは「泡瀬沖埋立地利用計画課」「マリンシティ泡瀬計画課」などであるが、市民が耳にしてピンとくる・あるいは何となく分かる名称に変更してはどうかと思う。

2-6.最後に

東部海浜開発事業はその投入金額・規模がとても大きいため、ともすればマリンシティさえできれば市が劇的に活性化し、経済状況も雇用問題も干潟の浄化も観光客の増加も全て上手くいく、と目がくらんでしまいかねない。

沖縄市が「国際文化観光都市」としてやっていくのであれば、市民一人一人が埋立・本事業に対して意識を持つことと、そのための地道な活動が必要不可欠ではないかと思う。行政や関係者だけが話を進めていくのではなく、全市民が意識を持って・何らかの形で事業計画やまちづくりにかかわっていくことが、内容のある・継続性のある沖縄市の活性化に繋がると思う。

沖縄市と市民は車の両輪であり、一方がパンクしたままではどこにも進まないし、同じ方向を向かなければやはり前には進まない。

前に進むための第一歩として本検討会議が足跡を残したので、ぜひとも今後へと繋げていってほしいと思う。また、私も一市民として本事業にかかわりを持ち続けていきたい。

そして沖縄市には、どんどんと明るいビジョンや前向きな姿勢を市民に示して、牽引していってほしいと思う。